

---

# 魔力と知識の使い方。

空いおん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔力と知識の使い方。

### 【Nコード】

N3619X

### 【作者名】

空いおん

### 【あらすじ】

得体の知れないパソコンの電源を入れたら美少女に会っちゃいました。それでここは何処……。

異世界トリップものファンタジーです。あまり主人公が強すぎるって感じはないと思います。たぶん……きつと……恐らく……。

更新速度としては、最低でも1週間に1話つくくらいを予定しております。のんびりやっていく予定です。

## 第1話（前書き）

はじめまして。空いおんです。

文章がゴタゴタしないように気をつけていこうと思っ  
ていますが、思っているだけなのかも知れません。読  
み辛ければ言ってください。がんばって改善し  
ます。

## 第1話

「ここはどこだろう・・・。」

俺は、下手をするとキングサイズよりもでかいんじゃないだろうかとこのベッドに横たわっていた。このベッド、凄くやわらかいんです。どのくらいやわらかいのかと言いますとですね、体が沈み込んでくらくらい。うん、俺みたいな一般人では絶対に寝ることなんて出来ないようなベッドですよ。あとですね、天蓋つてものを生まれて初めて生で見ました。

さてさて、俺はどうしてこんなところで寝ているのでしょうか・・・。

俺は大学の講義を終えて、今日はさっさと帰って買い物にでも出かけようかと思っていたときでした。俺の高校からの友人がなにやら怪しげなサークルに入っておりまして、確か名前は・・・『オカルト科学研究会』。略してオカカケン。若干言い辛いのがミソなんだそうです。それですね、そのオカカケンの友人、岡<sup>おか</sup>賢君<sup>けん</sup>が「面白いものが手に入ったから、見に来てよ」というものですから、ついて行ってしまったのです。

そうそう、これが悪夢の始まりだったわけですよ。いや、悪夢なのかは分からないんですがね。

オカカケンの岡 賢についていくとオカカケンの部室には古めのパソコンが1台置いてありました。ちなみにこのオカカケン、部員はオカケン、俺、1年上の先輩が2人の4人構成なんですが、俺は幽霊部員なんでまともに顔を出していないんです。元々、そんなに興味なかったし、なんとなくサボれそうなのと付き合いで入っただけですから。

部室に入ると、胡散臭い本やら壁に這わせたLANケーブルやら、得体の知れないアイテムなどカオスと呼ぶに相応しい部屋でございました。LANケーブルをたどっていくと、件のPCでしようか。年季の入ったPCにつながっていました。

「ねえ、健君。このPCの電源入れてみてよ。」

健たけだって言うのは俺の名前です。フルネームで武田たけの 健たけのって言いま  
す。若干言い辛いのがミソです。ここで自己紹介させてください。  
名前はもう言いましたね、家族構成は両親と妹が1人。ちなみに妹  
はモデルをやっています。雑誌とかで見かけたら俺に声を掛けてく  
ださいね。3冊ずつ買いますんで。シスコなんですよ、ええ。か  
わいいやつなんです。・・・両親は専業主婦の母とエリートなサラ  
のリーマンな父。そこそこの稼ぎはあるみたいですね。あとですね、  
自慢じゃないんですけど、自慢じゃないんですけどね？うちの家族  
みんな美形なんです。なんてすばらしい。

俺はおじいちゃん似なんですけどね。

「・・・・・・・・」

「あれ？どうしたんだい？健君。」

おっと、少しばかりブルーが入っておりますよ。大丈夫です。いつものことですよ。

「ああ、いや。なんでもないよ。PCの電源をつければいいんだよね?」

「うん。このPCさ、何でも異界から飛来した鉱石を半導体にして作ったものらしいんだ。何だかロマンを感じないかい?」

いやまったく。とは言えないんですよ。オカケンは変な趣味を持ってますが、見た目がずば抜けて優秀なでございます。茶系の女の子みたいなボブヘヤー、小動物みたいなかわいい顔。高校生の学園祭で女子を押しつけてミスコンで優勝した実績を持つてるんですよ。本人は気にしているみたいですけど。このキラキラした目をみちゃうとYESとしか言えないでございますよ。

「NOと言えない日本人か・・・。」

その代表みたいなものでしょうか、俺は。

「このPCさ、何でも異界につながっているって言う噂があるんだよ。それでPCに電源を入れるときに審査されていて、その審査を通った者だけが異世界の英雄になれるとかなれないとか。」

何ですか、この胡散臭さ。話を聞く限りPCの電源をつけるだけで良いみたいなんでさっさとつけて帰りましょうかね。

そう思って気軽にポンつと電源を入れたんです。

そこまでは覚えておりました。

さて、今の状況がさっぱり分かりません。

キングサイズらしきベッドの上でねっころがって居ると、このでかでかとした、いや、煌びやかな一室が目に入ったんですが、いやはや王侯貴族様のお部屋様でございますか。そういいたくなくらいキランキランしてるんでございますよ。俺はこの部屋では絶対に暮らせないですね、落ち着かないっいたらありやしません。

「天井が眩しっ。」

ぼそりと呟く。天井には幾つかのシャンデリアらしきものが、周りには絵画。飾りつけなんてここまでいるのだろうか。

コンコン

おや、誰かいらっしやっただようですね。でも俺はこの部屋の主ではないんです。ちよいと隠れておきましょうか、食べられても怖いんで。あ、クローゼットお邪魔しますね。

「失礼いたします。お加減は・・・え？」

クローゼットの間隙から様子を見るとそこには、なんと美人メイ

ドさんが！美人が重要なんです。御髪の色はロゼですね、俺よりも1つか2つくらい年上でしょうか、あとクローゼットの中い匂いがしますよ。何だか甘い香り……。

「だ、誰か！」

部屋の中がもぬけの殻だと分かると、メイドさんは人呼びにいったんでしょかね。部屋を出て行きました。では、今のうちに抜け出しましょう。

「……よいしょっと。」

扉を開けて豪華なクローゼットから抜け出す。すると、1枚の布が目にはいりました。衣装棚の引き出しからはみ出たそれを引き出してみますと、それはなんとも、まあかわいらしいピンクの下着。所謂、おパンティー様でございました。フリルがところどころにあしらわれており、けれども派手すぎず高貴なものを感じさせる。

「……スバラシイ。」

「何が素晴らしいんですの？」

「ッ！！？？」

驚いて振り向くと、そこには赤髪の気の強そうな美少女が仁王立ちしております。

髪は腰ほどまで伸ばし、頭には若干癖毛が目立つ。瞳は宝石をはめ込んだかのような真紅に燃え、気品溢れる顔立ち。年の頃は10代半ばといったところでしょうか。服装は軍服とブレザーを足して



割ったような服、左胸には校章のようなものが伺える。そして、後ろには先ほどの美人メイドさんが。

「屋敷の前で倒れていたの、医師師に診て貰おうと思っていたのですが……その様子では大丈夫そうですわね。」

こめかみにくつきりと青筋が立っていらっしやるので、これは相当お怒りになられている様子。先ほどから俺の汗が止まりません。

「あ、あのですね……その……可愛らしい下着ですね。」

「お死になさい。」

天使のような微笑のあとに俺の顔面に指をさすと、ヒュツと一瞬空気が吸い寄せられるような音が鳴り、眼前が光に包まれたかと思つと大きな爆発音がして俺の意識は途切れた。

## 第2話

目を覚ますと先ほどのベッドにまた沈んでいた。

「お目覚めですこと？」

横を見ると、ベッドのそばに置かれた椅子に先ほどの少女が腰掛けていた。そして、横には美人メイドさんが！

「気絶魔法程度でダウンするなんて……貴方、本当に貴族ですの？情けない。」

「……気絶魔法？」

今、魔法とおっしゃいました？今時、魔法少女の妄想に浸る子なんているのでしょうか。そういえば最近は気候の変化が激しいですから、少しばかり頭がどうにかなくても不思議ではないですけど。

「気絶魔法もご存知ないなんて、何処の田舎の箱入りですか？魔法ぐらいご存知ですよね。」

俺はどうやら、この少女を呆れさせてしまったようでございます。しかし、魔法なんていわれても……。

「……いや、知らない……かな。お兄さんに教えてくれる？」

きつと一人で遊んでいるうちに、そう考え込んでしまったんですよ。可愛そうに。なにやら状況は分かりませんが、助けてください。つたみたいなのでこのくらいは付き合いますよ。

そういつと、少女はプルプル震えだした。とても嬉しいのだろう。

「あ、貴方は……」

「うん。」

さあ、おいでと腕を広げてみる。女の子が泣きたいときには胸を貸すのが男……いや、紳士というものでしょう！

「私を馬鹿わたくしにしてるんですのー！ー！ー！！！！？？？？」

その瞬間、一瞬で少女の手のひらに出来たサッカーボール大の光の球が俺の顔のすぐ横を小爆発を起こしながら背後の窓際の壁に向かっていき、壁を3分の1ほど吹き飛ばした。

「お、お嬢様落ち着いてください！またパルディン様に怒られますからあ！」

美人メイドさんは半泣きで少女を宥めようとしている。その甲斐があったのか、少女は少しばかり頭が冷めたようでした。

「はあ、はあ……すう、はああ」

「ま、魔法！？今のが　まさか、そんな！」

「?・・・あなた魔法を・・・本当に知らないんですの?」

コクコクコクと三回ほど頷くと、少女はひとつため息を吐いた。どうやらあいつの言っていた異世界とやらに本当に来てしまったようです。こんなことならさっさと帰って居ればよかった。

「あなた

」

「何事ですか!!」

バンツと強く扉を開く音と同時に、軽鎧を身に纏った男たちが部屋にいらっしやいました。数は10人程でしょうか。もう、いやな予感しかいたしません。

「貴様!何者だ!お嬢様から離れる!!」

軽鎧の方々は部屋の壁が粉々になっているのを見ると、顔を青くして俺に離れるようおっしやっておりますが、粉々にしたのは俺じやございません。そのお嬢様です。

「パルディン様の結界魔法を破るなんて・・・かなりの使い手だ!お前ら、油断するなよ!」

リーダー格の方でしょうか。その方の合図と共に周りの方々が俺を取り囲もうと動きます。これは非常にまずい、つかまるどころかここで殺されてしまいそうです。異世界に来てしまったことや今の状況のことを考えると本気で泣きそうですよ・・・。

(・・・死んじまうなんてごめんだ。)

「ッ!?詠唱呪文!?!」

近くに寄ってきた1人が何故か驚かれて、その瞬間他の方々に緊張が走った様子。今なら砕けた壁から逃げられる！

「クソッ！」

一瞬で脚に力を入れ、全速力で外に向かって走る！後ろから6人ほど追いかけてきている。砕けた壁を抜ける際に崩れかけの壁を蹴り飛ばす！すると3人ほどその崩落に遮られ足が止まった。外に出るとそこはベランダ・・・ベランダ？

「嘘!!!???ここ2階!？」

外の景色に脚が止まりそうになったが、後ろから残りの兵士が俺を襲おうと腰にさした剣に手をやる。本当に絶体絶命ですよ！これは！

「逃がさん!!!ここで　　!!!」

「くおおおっ!!!」

俺はベランダの手すりに手をかけると、それを飛び越えた。2階なら飛び降りても死にはしないだろう。落下しながらそんなことを考える、でも本当に魔法が使えたのなら・・・飛んで逃げられたのにな。

フワッ

「え　　・・・いてっ!!!」

一瞬、身体が浮いたような感覚を覚えると、俺は地面に尻餅をついた。

「身体が……浮いた？」

ふと、落ちてきた場所を見るとそこにはさっきの少女が居た。彼女が助けてくれたのだろうか。

「待てー！ー！！逃がすなー！！」

兵士が捕縛用らしき綱を使って2階から降りようとしている。急いで逃げないとまずそうですね。とりあえず屋敷の敷地から出なければ！

俺は、敷地を走って上れそうな壁を越え、外に出た。

## 呉藍の少女

私が学園に登校しようとしていたときのお話ですわ。<sup>わたくし</sup>

朝は日が昇る少し前、御付のメイドであるエリルに起こして貰い、魔法学を中心に予習と復習。その間にエリルにお風呂を沸かして貰い、予習・復習が終わり次第入浴。そして、入浴後に朝食をとり、着替え等の準備を終わらせて登校。

これがいつもの予定ですが、その日は少し予定が狂いましたの。

「あら？」

ふと登校しようとして敷地の門を出ると、そこには黒髪の青年が倒れていました。

髪の色というものは、その個人の属性をあらわしますの。私などは赤ですから、単純に考えれば火の属性になりますわね。単純に・・・といいますが、その属性の中にさらに系統がございますの。たとえば、火属性の中には 火炎系・加熱系・爆発系など

他にも発見されていないものがあるかもしれませんが、全体の8、9割はこのうちの3つに絞られるでしょう。

私は3つ目の爆発系エクスプロージョンになりますの。これは他の2つに比べて攻撃に特化していて、数も少ないので戦いの戦力として重宝されますわ。

しかしながら、この方の髪の色は妙ですわね。単純に考えれば、髪の色が濃ければ濃いほど魔力が高いのですが・・・黒色なんて見たことも聞いたこともありませんわね。

「服装から見て貴族かしら。変わった生地を使ってるようですね

ど。」

つるつるした光沢のある生地ですが、絹を使ってもこんな光沢は出ませんわ。

「ウィルナー。この方を私の部屋へ寝かせておきなさい。」

「は、いや・・・しかし。」

「かまいませんわ。私が見つけたのですから、お父様には黙っておきなさい。あの人の玩具なんかにはさせるつもりありませんの。」

アガット家の専属騎士隊長であるウィルナーは渋い顔をしながらも、私の命令を聞き入れましたわ。仕方がありませんわ、彼はアガット家に仕えている身。私よりも当主であるパルデイン・アガット・・・私の父の命を優先しなければなりませんから。

「私はこれからご当主様と城の方へ向かいます。この方については誰にも言わないようにいたしますのでくれぐれもご注意ください。いざという時は、副隊長がおりますのでそいつに言っちゃってください。」

そういうと、ウィルナーは黒髪の青年を担いで屋敷へ運び込みましたの。ウィルナーが屋敷に入って行くのを見やりながら私は学園へ向かいましたわ。



「黒髪の子がいない？」

私が学園から帰ってくると、黒髪の子の様子を見に行かせたエリルがあわてて戻ってくるなりそう言いますの。まったく、あまり手を焼かせないで欲しいものですわ。

「礼も言わず去るとは、とんだ礼儀知らずですわね。いいでしょう。」

学園の手提げ鞆を他のメイドに手渡し、部屋へ向かう。

「この、破月はげつのリリーナ・アガットがたっぷり教えて差し上げますわ！」

### 第3話

中世期のヨーロッパのような街並みを走り続けること10分ほど、何とか撒けたようです。

「……あれ？」

ここで不思議に思ったのですが、俺は10分の間全力疾走していません。にも関わらず、まったくといっていいほど疲れていないのです。

「んなアホな……。」

しかし、街並みを見てみるとここが日本ではないことを思い知らされました。やはり異世界とやらに来てしまったようです。

それと、走って来る際に町の人を見たのですが、皆々の髪の色や目の色がおかしいのです。金髪碧眼とかそういうものではないのです。ある人は緑色の髪と瞳、ある人は青みがかつた髪と瞳。そして黒髪黒目という人は1人も見当たりませんでした。

「もしかして、これ目立ってるんじゃない……。」

このままだと、時間の問題でしょう。とにかく出来るだけ離れな

いと。  
この街は、少し小高い山の上に出てくるようで、頂上に城がありました。ここは城よりも少し低い位置ですから、城下町のようなものでしょうか。何気に建物や、恐らく武具店などの商店も高級な感じですが。あと値札が0で一杯なんです……。

「あれ？」

取り合えず、下っていけば良いかと歩いていると高い壁に遮られていたいたので、迂回するよう歩いていたのですが、いつまでたっても壁が抜けられないのです。

「困った……。」

しかし、まあ歩いていくことしか出来ないのですが。

「ん？あれは……。」

そしてまた、しばらく歩いて行くと門でしょうか。恐らくここから外にいけるのでしょうか。ですが、門番らしき人が2人、左右に配置されています。

「参ったな、こりゃあ出られないかも……。おつ。」

少しばかり様子を伺っていると、門が開き、外から1台の馬車が入ってきました。どうやら何かを運搬しているのでしょうか。白い布で覆われているので中は見えません。

「あの馬車に潜り込んでいけばそのうち出られるかもしれない。」

何もしないよりは、まず行動。と、馬車を尾行します。

「黒髪は目立つなあ……。なんか隠すものないかなあ帽子とか。」

パーカーとか着ていればよかつただけど、今来ているものはド

レスシャツ的なものと黒のベスト的なものとネクタイ的なものと黒の綿パン的なもの・・・少しフォーマルっぽく仕上がっております。こういう格好が好きなんですよ。俺。

「こつちの世界にはなさそうな服装だよなあ。」

目立つ要素が満載ですね。

しばらく馬車をつけていると、大きな看板のついた店についた。看板には奴隷商と書かれている。

店の前に馬車が止まり、御者が白い布をめくると大きな檻が姿を現す。中には幼さが残る少年や少女、または美女が居たり、大体20人ほどだろうか。全員が檻褌を着て、手枷をさせられている。

「むう・・・なんか日本に居ると絶対に見られない光景だよなあ・・・かわいそうに見えて来るんだが。」

だからといって、助けることが出来るわけではないんですけどね。

檻の中にいる全員を連れて御者は店の中に入っていき、今のうちに中に入ってしましましょう。

白い布をめくり、檻の中に入る。幸い鍵は開けっ放しになっていた。

## 第4話

荷馬車に揺られること、しばらく。そろそろ尻が痛くなってきたが中々馬車が止まらない、そろそろ走っている中道に飛び降りようかと考えていたとき、馬車が止まり、外から話し声が聞こえてきた。

「

」

「

」

2、3言会話が聞こえて馬車が再び動き出す。布の隙間から外を見ると、先ほどの高級感のある街並みからは打って変わって質素な街並みに変わる。

（さっきの門を潜るだけでこんなに違うのか・・・）

人の群れも先ほどより多く、武装している人も多い。それも、兵士と言つような鎧や槍ではなく剣やボウガンを持ち、皮の鎧を着込んでいる。

（盗賊って、訳じゃあないよな？）

また暫く馬車に揺られると、馬車は路地のようなところに入り停止した。

（看板が見える・・・奴隷、市場？）

名前からして、恐らくここから奴隷を仕入れるのだろう。奴隷も立派な商売として成り立ってるのだ。国からしてみれば難民に金を使って救済するより奴隷にして商品にしたほうが儲かるのだろう。

（胸糞悪いけど、御者が出払ってるし今のうちに出て行こう。）

俺は鍵のかかっていない扉から出ると、路地を抜け群衆に紛れるのだった。

周りを見渡すと、殆どの人が茶毛や栗毛の色をした髪の毛と瞳をしていた。武装している人の中には稀に緑や青などの色を見ることが出来る。だがそのどれも色がくすんでいて、あの爆裂少女ほどの鮮やかさは無かった。

ある程度歩いていくと、露店が並んでいる大通りに出た。他の通りよりも活気付いているのが分かる。

（そうだ・・・ある程度お金を持ってないとまずいかも。）

今、俺が持っているものは財布と携帯くらいのもんだ。携帯は案の定つながらないし、財布も逃げている途中どこかで落としてしまったらしい。

そんなことを考えながら歩いていくと、ひとつの露店が目にはいる。

「さあ！うちの商品を是非見ていってくれ！大陸の端の国の珍品か

ら、貴族様御用達の高級品まで何でも揃ってるよ！おっと、もちろん普段着だってあるから心配すんなよ！」

露店の店主は40代くらいの髭面の筋肉隆々なおっさんだった。髪や髭、瞳はブラウンで顔は温和な雰囲気がある。

(そついやぁこの服売れっかな?)

恐らくこの世界では珍しい化学繊維を使ってる。辺りの人を見回しても、簡素なシャツやズボンを着ているだけ。この服は目立つし、金になるなら売り払ってこちらの普段着を手に入れよう。

俺はそのおっさんの前に立った。

「いらつしゃい！おや？その格好・・・貴族の坊ちゃんかい。こんなところにいると色々危ないぜ！」

貴族の子息と勘違いしているようだった。

「いえ、大丈夫ですよ。心配には及びません。ところで服を売りたいのですが良いですか？」

そついうと店主は何やら驚いた表情をする。何かおかしなことを言ったのだろうか。

「あ、ああ。かまわねえよ・・・いや、すまん。貴族に敬語で話されると何だか妙な気分になるもんだな・・・ゴホン、坊ちゃんはお忍びかなんかで？まさか家出だったり　いや、詮索はやめとつづ。」

「ええ。そうしていただければ幸いです。」

とりあえず、勘違いに乗ることにする。まだ追われている可能性もあるのであまり留まりたくはない。さっさと服を買ってこれからのことを考えなければならぬ。

「まあそうだろうよ。どれ、服を見せてもらおう。．．．ああ、これを着とくといい。安心しな、古着だが質は悪くないから。貴族の坊ちゃんは気に入らないかも知れねえが。ガハハ」

「いえ、ありがとうございます。助かりました。御代は．．．？」

「そんならいサービスするさ！うちらみみたいな旅商人は店持ってる連中と違って信用があんましねえからな！サービスでもしねえと客が寄りつかねえって！」

そういうと店主はまた「ガハハ」と笑って服の品定めに入った。体格はごついけど、柔和な感じの顔と一緒に、やっぱり良い人だったようだ。でも、なんだか商人って感じがしないな。想像していた商人って、何かこう．．．脂ギツシユな豚のような、強欲なイメージ？だったんだが。

「ほお。こいつあ変わった生地してるなあ．．．つるつるして肌触りも良い。何より絹みてえなつやしてやがる．．．。それにこの襟つきの白シャツ、おしゃれな貴族がよく好んで着ているが．．．これほど薄くて丈夫なのは見たことねえな。．．．。」

そういうと店主は何やら考え込む。何か駄目だったのだろうか。

「坊ちゃん。こいつあうちでは買い取れねえ．．．。」



「え？」

やはりあまり価値が無いものだったのだろうか、そうになると飯や宿のお金が無くて野宿することになってしまふ・・・ある程度のお金にはなると思っただが。

「こいつはかなり貴重なものみてえだし・・・うちでは値段が付けられねえ、おそらくだが上着とシャツだけで100万ギルは下らないだろうよ。」

「100万ギルですか・・・？それってどのくらいの価値なんですよ？」

「ん？なんでえ、お金の価値がわかんねえのかよ！・・・まったく、これだから貴族の坊ちゃんは。まあ、あんまりこの平民区画にこねえ『上』のほうの貴族の子供は金の価値を分かってねえ子が結構居るって聞いたが・・・まさかここまでとはねえ。」

そういうと、店主は参ったと言わんばかりに頭をかいた。恥を忍んで聞いたが、金の価値を聞いておかないとこれから先困ることになるのは目に見えている。

「すみません。余り、外のことを知らないもので。教えていただけないでしょうか。」

ここでは貴族の坊ちゃんを通ず。

「ああ、まあまだ暇だしな。相手してやるよ・・・どのくらいしからねえんだ？」

「まったくです。」

「まったくか……。」

「まったくです……。」

店主は呆れたような諦めたような顔をして、ひとつの袋から4種類のコインを取り出す。

「まずはこいつだ、これはイヤクール銅貨だ。ここ、イヤクール王国で保障されている貨幣だな。この銅貨1枚で5ギルだ。……ああ、ギルって単位は世界各国の商人組合によって決められたものでな。たとえば、同じ金貨でも国によって金の含有量に差がでるわな。そうなると同じ金貨でも価値が変わってしまい、貿易がしにくくなる。そこで貨幣とはまた別にギルという単位を作ったわけだ。」

つまり、貿易するときには相手が金含有量の高いA国の金貨10枚、自分が含有量の高くないB国の金貨10枚を持っていたとしても、それは同価値ではない。だがそれを考えていくと、多数ある国の金貨の相互関係を覚えていくより『ギル』という基準を作ってしまうほうがやりやすいということだろう。……どこかの金貨を基準にすると、それはそれで争いを招く事態になりかねない。ということもあるそうだ。

そして、店主が言うには主にここ『イヤクール王国』で使われているのはイヤクール硬貨であるらしい。価値は、銅貨が5ギル、赤銅貨が100ギル、銀貨が1,000ギル、金貨が1万ギルとなっている。

「硬貨の種類の数も国によっちゃあ違うからな。貨幣に数字が書いてあるだろう？これがギル数だからギルを覚えときゃあ何とかなる。俺たち商人は書類上で取引することもあるからいろいろ覚えなきゃなんねえがな。普通に暮らすなら、ギルの価値と硬貨の数字を見りゃ暮らせるぞ。」

「ありがとうございます。参考になりました！」

そういつと店主は照れくさそうにした。すごくいい人です……この人。

「しかし、悪かったなあ。今そこまで持ち合わせがなくてよ。組合に寄れば金が下せるんだが……。今日は売るつもりで来てたんでなあ。」

「いえ、構いませんよ。無理を言ったのはこちらですから。」

「へえ〜。さつきから思ってたんだが、坊ちゃん全然貴族らしくないな。普通もつとぶんぞり返ってるもんなんだが。」

その言葉にドキツとするが、何とか「まあそういう貴族も居ますよ」「みたいなことを言っごまかす。正直、いつボロが出るやら。」

「ふーん、どうだい。これも何かの縁だ、少し待っててくれねえかい？今日はもう店畳んじまうから。」

そういつと店主はニカツと白い歯を見せる。

「え？もうですか？」

まだそこまで日は暮れていないし、人通りも大通りならまだまだある。

「ああ、珍しい服だしやっぱり興味があるのさ！それに今日はもう客はこねえ気がする！」

気がするって・・・本当にこの人は商人なんだろうか・・・。

## 第4話（後書き）

少し書き方を変えてみました。

## 第5話

暫く待っている、露店を畳み終えた店主が歩いてくる。恐らく5分とかかかっていないだろう、店を畳むにしては物凄い早さだ。

「わりいね坊ちゃん。待たせちまったかい？」

「いえ、大丈夫です。」

「そいつあよかった。じゃあ組合まで着いて来てくれるかい？金を下しちまうから」

俺は「ありがとうございます」と一言お礼を言って、店主についていくのだった。

暫く歩くと、赤いレンガの目立つ大きな建物に着く。店主曰く、ここが商人組合なんだそうだ。商人組合は、冒険者ギルド、傭兵団に並ぶ民間組合らしい。大体の商人はここに登録して、組合会費を払う。そうすることによって組合の様々な恩恵が得られるというわけだ。

「その中のひとつが、この預金システムだな。この預金証があれば、各国の組合でお金が引き出せるのさ。こいつのおかげで盗賊による現金の盗難被害がかなり減ったらしい。」

商人組合ではかなり魔道具が導入されていて、他のギルドに比べ

て技術の発展が早いらしい。

(商人に冒険者、傭兵や魔道具・・・そして魔法。)

様々な単語が出てきて改めて異世界に来てしまったのだと痛感する。だが、沈んだ気分の中にもわくわく感あるような、不思議な気分だった。

「あれ？あの人たちは冒険者ですか？」

建物の中に入っていくと、武装した人がちらほらと見えた。

「ああ、あれは俺と同じく旅商人ってやつだ。旅商人ってのは、1箇所到店を持たず、色んなところを旅して回る商人なんだが・・・まあその性質上、盗賊や魔物に出会うことがしょっちゅうあるからな。ある程度露払いができねえとだめなのさ。」

そういう店主を見ると、所々に傷跡が見える。

「護衛がつけばその分商品の値段も上がっちゃうからな。それなら自分で自分の身と商品を守るようになりゃいいのさ。商人根性もここまできりゃあ誇らしいもんさ！」

そう言って店主はガハハと笑う。

店主がお金を下すと、俺にそれを渡す。小さめの袋をあけてみると金貨がたくさんあった。

「ある程度小銭も混ぜておいたから支払いに困ることはねえだろう。」

店主は再びガハハと笑うと、俺の背中をポンポンと2回叩く。

「ありがとうございます。．．．えっと、店主さん。」

「ああ、そついやあ名前を言ってなかったか、俺はマハットだ。貴族様に自己紹介つても何だか妙な感じだな！ガハハ！」

ちくりと胸が痛む。嘘はあまり吐きなれていないのだ。

「ありがとうございます。」

消え入りそうな声だったろう。それでもマハットさんは豪快に笑ってくれた。

「いってことよ！困ったときはお互い様つてのを信条に生きてっからな！」

マハットさんはその大きな拳で大きな胸をドンとたたく。その姿を見ていると、なんだか嘘を吐いているのが心苦しくなる。言っつてしまいたい気持ちと、まだ会つてすぐの人間に言つて良いものかという気持ちとが心で闘ぎあっている。

「．．．．何か辛い事があつてここまで来たのか？」

はっとして、マハットさんの顔を見る。どうやら妙な顔をしてしまつていたらしい。慌ててごまかそうと思つたが、この言葉を言っ



たマハットさんの目を見ると、まるで自分のことのように心配してくれているようだった。その言葉と表情が俺の背中を押した。

「信じられないかも知れませんが……実は」

この世界に来た時のこと、来てから何があったのか、ここまで至る経緯を正直にマハットさんに話す。PCのことは上手く説明できたかどうか分らないが、マハットさんは「情報を扱う魔道具のよくなものか。」と納得していた。

「以上がここまでできた経緯です。嘘を吐いてしまって……ごめんなさい。」

話している間、マハットさんは驚いた表情を見せたり、何やら考え込むような表情をしていたが、最後まで口を挟まず聞いてくれた。そして、俺が最後まで話したあと頭を下げるとマハットさんはポンと肩に手を置いた。

「まさか異世界人だとは思わなかったが……確かに何か隠してるような気はしていた。貴族にしては偉ぶって無かったしな。」

俺が顔を上げると、マハットさんはニカツとまた白い歯を見せて笑ってくれた。

「恐らくそいつぁ召喚魔法の一種だとは思って……そういえば

「！」

マハットさんは何かを思い出したように再び腕を組む。人と話するときの癖なのだろうか、マハットさんはいつも腕を組んでる。だが柔らかな雰囲気を持っているので、余り威圧感を感じない。「余り」というのは、マハットさんは大男だ。そのあたりに嫌でも感じてしまうのかもしれない。俺が身長175くらいあるのだが、マハットさんは俺よりも20は高いだろう。そして鍛え抜かれた筋肉、筋肉だるまというほどではないが長年戦ってきて洗練されている気配を感じる。それはうっすらと見える無数の生傷がそう見せるのかもしれない。

「異世界者の話を聞いたことがあった。」

「え？本当ですか！？」

マハットさんの言葉に、今度はこちらが驚いた。

「ああ、確か何かの文け……いや、どこかで話を聞いたんだが。」

マハットさんは思い出すように頭に手をやる。無精髭が似合う顔に、若干短めにそろえた赤茶の髪と瞳。いかにもダンディーな感じのおっさんだ。

「まあ、伝説のようなものだ。……1000年ほど昔、坊ちやんと同じように黒髪黒目の異世界者が、そのときには大規模な魔術が使われて召喚されたらしい。」

マハットさん曰く、魔法は陣や記号を使わない術、魔術は陣や記

号を媒体にした術だそうだ。魔法は個人の魔力によって効果が変化するが、魔術は媒体に決まった魔力量を練りこめば誰にでも使えるらしい。

「その時代は世界聖戦時代と呼ばれていてな、この世界は3つの国に分けられていたらしい。それは三竦みの状態になっていて長年平和な状態が続いていたらしい。」

「にらみ合いが続いていたということですか？」

「そういうことだ。どこの国もあわよくば覇権を・・・ということだな。」

そういうと、マハットさんは周りを見渡すと場所を移そうと言った。商人柄あまり情報というものは漏らしたくないらしい。それにそろそろ飯時だ、マハットさんに情報量代わりに飯代ぐらい出させてくれと言ったら「いいのか？そんなこと言って。」と言ってニヤリと笑う。

（案外この人はお茶目な人なのかもしれない・・・。）

そう思いながら、自分の言葉は少し早まったかもしれないと後悔するのだった。

## 第6話

俺とマハットさんは、マハットさん行きつけの居酒屋兼宿屋のお店に来ていた。そこまで大きな店ではないが、それなりに繁盛しているようだった。マハットさん曰く（これも定番のようになってきたが）、この店は熟練の冒険者や商人が集まるらしい。どうやらこの女将さんが有名な冒険者だったらしく、自然とそういった人たちが集まるらしい。

「よう、レベッカ！相変わらず繁盛してんなあ！」

マハットさんはカウンター席に座ると女将さんに話しかけた。

「なんだい、嫌味かい？あたしとしてはもっとあんたらが宣伝してくれてもいいんだけどね。」

レベッカさんは恐らく30代後半から40代前半くらいだろうか、かなりの美人さんだった。暗めの緑色の髪を後ろで縛っていて、落ち着きのありそうで快活な雰囲気、女傑とっていいだろう。そういう雰囲気を持っていた。

「おいおい、こんだけ質の良い連中が集まってんだから余計なモンはいらんだろう。」

「あたしはもっと人が来て繁盛してもいいんだけどね。」

レベッカさんがそう言い放つと、周りの客から軽い笑いが起こる。

「馬鹿みたいな商人や新米の生意気な冒険者が来るとつまみ出す癖

によお。」

「ふん！気に入らない客はうちの店にや要らないさ！」

そういうと、ふんっと胸を張る。マハットさんはガハハと笑うとレベツカさんにエールと飯を2人分頼んだ。

「そっちの子は？えらく変わった色してるけど。」

レベツカさんは俺のほうを見ると、珍しそうに髪や目を見る。だが、その間も料理している手は休めない。

「ああ、良くぞ聞いてくれた！うちの客として来たんだがな、聞いて驚くなよ・・・この坊ちゃん、異世界から来たらしい。」

マハットさんがそういうと、レベツカさんは「そんな冗談、信じるわけ無いでしょうが。」と笑い飛ばす。だがマハットさんが経緯を説明していき、黒髪黒目というのもあってなんだか妙な雰囲気になっていく。

「・・・確かに、黒髪黒目つてのはこの国にやあいないけどさあ。でも、だとしたらまた戦争でも起こるってのかい？」

「戦争・・・ですか？」

俺がそう聞くと、レベツカさんは困ったような顔をして俺とマハットさんにエールを出す。

「世界聖戦の話は知ってるかい？」

世界聖戦。さっきマハットさんから少しばかり聞いたものだろうと、俺が頷くとレベツカさんは肉料理を2人分作り終えて俺とマハットさんに出し、カウンターの内に置かれた向かい側の椅子に腰掛けて話し始めた。

「ある程度はマハットに聞いたみたいだね。世界が戦乱に飲み込まれていた時代、世界聖戦時代……。3つの国が三竦みになっていた時代は『黄金の時代』と呼ばれていてね。3つの国が互いを牽制していたつかの間の平和が訪れていたのさ。」

レベツカさんは「まあ、そのマハットに聞いた話だけだね。」と言う。民間には余り知られていないものらしい。なので黒髪黒目は確かに珍しいが、この話を聞いても知らない人の方が多いので気にしなくても良いと言われた。俺は、はいと頷くとエールを呷った。

「その平和が崩れた原因つてのが、大召喚魔術による戦士の召喚だったのさ。その戦士つてのが黒髪黒目だったと伝わっていてね……。非常に強力な力を持っていたらしいわ。」

「強力な力ですか……。？」

「そうさ！膨大な魔力、千手先を読むとまで謳われた知略、そして圧倒的な武術戦闘。これらを兼ね備えた最強の戦士だったわけさ。」

「本当かどうかはしらねえがな！ガハハ！」

マハットさんはそう言いながら既に4杯目のエールに口を付けていた。もう出来上がっているようだ。

「でだ……。他の2国がそれを知ってね、水面下で手を組んでその

国を攻め入ったのさ。」

レベツカさんは少しばかり劇調に話し出す。それを聞いて他の飲んでいた冒険者や商人も集まり、盛り上がり始める。皆酒が回り、まるで言うかまんま宴会になった。

「だが、その黒い戦士の活躍によってその2国を逆に滅ぼしちまったのさ。その黒い戦士は国では英雄と呼ばれてひとつの宗教のようになっただけだ。」

「そっから面白い話でよお！その黒い戦士は人望を集めすぎたんだわ。王様以上にな！」

マハットさんが語りを引き継ぐが既にでろんでろんになっている。いつの間にか、おそらく8杯目のエールが注がれていた。

「それを妬んだ王様がその英雄を暗殺しようとした訳よ。だが、知略にも優れた英雄はそれを予想してたわけだ。それで、王様の計画した暗殺は失敗に終わっちゃうのさ。……だが、それで終わりにじゃなかったわけよ。」

マハットさんはカウンターに身を乗り出すと、わざとらしく押し殺した声で言った。エールをしつかりと握りながら。

「英雄は自慢の智謀をめぐらして逆に王様を貶めたんだ。そして、人望のある英雄は王の死後、統一国家の主となったわけだ。……だがその英雄も月日が経ち病に侵されてしまう。死期を悟った英雄王は3人の息子にあるものをわたすのさ。」

「あるもの？」

そう問いかけるとマハットさんはにやりと笑い。一度エールに口を付けると語りだした。

「林檎さ。」

「……林檎？林檎ってあの果物の林檎ですか？」

マハットさんは俺の反応をみて再びニヤリと笑う。この話を聞いたことの無い冒険者や商人も多いようで、その人たちがマハットさんに先を話すよう急かす。マハットさんはその反応がうれしいようで「どうすっかなあ。この先は有料にすりゃあ金とれっかなあ！ガハハ」と冗談を飛ばす。だが、しかたねえなあと続きを語る。

「3人の息子に、それぞれ自らの力を込めた林檎を渡したのさ。その林檎は『3つの黄金の林檎』と呼ばれ、それぞれ『知力』、『武力』、『魔力』を司っていたらしい。その林檎を受け取った3人が英雄王の亡き後、国の頂点に立っていたのさ。……だが、頂点が3人もいる訳だ。再び国は3つに割れる事になる。そして現代まで続く長い戦乱の世が再び訪れたわけだ……。」

先ほどまで騒いでいた人たちも、話を聞くために静かになっていた。レベツカさんが空になった俺のグラスにエールを注いでくれる。

「3人の王は自分以外の持っている『黄金の林檎』を欲したのさ。だが、3人の国は力が拮抗していたんだ。英雄王は再び三竦みで平和をつくろうと思ひ、息子らにそれぞれ3つの力を渡したようだったが……息子らの強欲までは見通せなかったのかもしれない。」

英雄王は自分の息子たちを信じていたのだろう。だからこそ、国



を守るための力を渡した。だが、息子たちはそれを裏切ってしまったわけだ。だがそれほどまでに林檎の力というものが、それぞれ強力であったのだろうか。

「欲望に駆られた3人の王は三国を・・・世界を舞台に大きな戦争、いや、3勢力入り乱れの乱戦を引き起こしてしまう。・・・そしてその結果、今のように小国家も大国家もある世界になってしまったわけさ。」

「おい！その、3つの黄金の林檎ってやつはどうなっちまったんだよ！」

聞いていた髭面の冒険者が割って入って聞く。

「ああ、その戦乱中に破壊されたのか・・・その、三国の面影がある大国家に受け継がれているのか。はたまたどこかに封印されているのか・・・。」

「・・・行方が分かっていないということですね？」

俺がそう言うとマハットさんは肩を竦めた。

「まあ所詮は伝説や御伽噺の類だしな。1000年も前の歴史なんてここいらの小国家じゃわかんねえよ。」

そういつてマハットさんは15杯目のエールを注ぐのだった。

## 第6話（後書き）

今回は昔語り中心でした。3つの黄金の林檎はご存知ギリシャ神話からアイディアを頂きました。

## 第7話（前書き）

小説の紹介文が一番難しいですね；

## 第7話

その後、酔いつぶれたマハットさんを数人で部屋へ運び込む。俺はレベツカさんに2人分の飯代と宿代を払うと、思いのほか安く、二人合わせても100ギルちよつとだった。宿も2食付で一人当たり50ギルと安かった。レベツカさんが言うには大体これが一般の民宿の相場なんだそう。今回の食事代はマハットさんが飲みすぎたせいで若干高くついているくらいだとか。

「ありがとうございます……。やっぱり結構重かったですね。」

手伝ってくれた他の商人や冒険者の人たちにお礼を言うと、「このくらい平気さあ！伊達に冒険者やってねえぜ！」と俺の肩を叩く。この店に集まる人は良い人が多いらしい。レベツカさんの影響が強いのもあるが、余り良い噂を聞かない人物には元々誰も教えないらしい。

「坊ちゃんも大変だな。俺たちでよかつたらいつでも手伝うぜ！」

「そのときは割安でお願いしますね。」

笑いながらそう返すと、こりやまいったねえと笑いながら1階の酒場へ降りていった。しかし、マハットさんが俺のことを坊ちゃんと呼ぶからそれが定着してしまった。どうにかならないもんかと苦笑いしつつ、俺も用意されたベッドへ入るのだった。

「ん……ぐうっ……くあ？」

朝起きると異様な光景を俺は見た。木で作られた天井、少し固めのベッドに、もうひとつのベッドで寝る茶毛の髭面のごついおっさん。一瞬、自分がどこに居るのが分からなくなったが、昨日あったことを思い出した。

(……そういやあ、異世界に来ちまったんだな。)

気分が沈みかけたが、桶に用意された水で顔を洗って気持ちを切り替える。用意されていたタオルで顔を拭くと、俺は1階の酒場へ降りていった。

酒場に下りると、レベッカさんが朝食を用意してくれているところだった。

「おはようございます。レベッカさん」

「あら、おはよう。よく眠れたかい？」

「はい、気持ちよく寝られました。」

「そいつは何よりだよ。この世界に来たばかりじゃあこっちの食事や寝床は合わないんじゃないかと思ったんだが、杞憂だったようだねえ。」

レベッカさんはそういつて笑うと、シチューのようなものを出してくれた。良い匂いがして、食をそそる。一口食べると口の中に野

菜や肉の旨みが広がる。とてもおいしかった。

「これからどうするんだい？」

「……正直、分からないです。帰る方法を探そうかとも思うんですが、手がかりがその黒い英雄の話しか今のところ無いので、どうしたら良いやら。」

来たときのことでもPCの電源を付けるまでのことしか覚えていないじゃ、どうやってこつちの世界に来たかも分からない。今はマハットさんに服を売ったお金もあるし、暫くはここにお世話になるのもいいかなと思っていた。しかし、そう思い通りにことが運ぶほど、この世界は甘くなかった。

「失礼する！ここの店主はいるか！」

マハットさんを起こし、二日酔いでへろへろになっているマハットさんを支えながら階段を降りようとすると、店の入り口から大きな声がした。すると、マハットさんが俺の歩みを止めた。

「？」

マハットさんは人差し指を口に当て静かにするよう促す。

「……」

少ししてレベッカさんが出てくる。入り口のほうに影になっていてよく見えなかったが、訪ねてきた者たちが店に入るって来ると俺は一瞬で緊張した。

( あの屋敷にいた兵士だ！ )

銀色の軽鎧を着て、紋章の入ったサーベルを装備している。数は5人、屋敷でも見た隊長格らしき人がレベッカさんと何やら話している。

「……アガット家の紋章ってこたあ『十二貴士特別騎士団』だな、ありゃあ。」

互いに聞こえる程度でこそそそと話す。

「十二貴士……特別騎士団、ですか？」

「ああ、ここイヤクール王国には王様から特別な勲章をもらった12人騎士が居てな、そいつらに仕えるそれぞれの騎士団をまとめて『十二貴士特別騎士団』と呼んでいるのさ。普通の騎士は王様に直接仕える身分だから高い身分を要求される。まあほぼ貴族の血筋でなければなれないわけだ……。だがこの特別騎士団は王国ではなく、それぞれ12の家に仕える身だから実力さえあれば身分が無くともなれるのさ、その12人の内誰かが認めればな。」

まあその分騎士よりは身分は低くなるがな。と一言付け加える。だが実力で選ばれるということは、それぞれがかなりの実力を持っているわけだ。中でもマハットさん曰く、あそこに居る副隊長は若くしてかなりの実力を持つらしい。

(あれが隊長じゃあなかったのか・・・)

歳は20代前半と言ったところだろうか、他の兵士と比べて若干鎧が豪華だ。頭には赤色のバンダナを付けて、腰には少し短めの剣を2本挿している。

「ここに黒髪の男が入るのを見たという情報が入っている。隠せばためにならないぞ。」

副隊長は高圧的にレベッカさんに詰め寄るが、レベッカさんは腰に手を当て一歩も退かない。

「何のことだい？うちにはそんな客来てないよ。確かな情報だったのかい？」

なんとも強気に出るレベッカさん。副隊長のこめかみが一瞬ピクッと動いたような気がする。まさに一色即発の場面。

「調べる。」

副隊長が他の4人に指示を出す。まずい、こっちに来る！

「まちな！人の店勝手に引っ掻き回すんじゃないよ！調べたかったらそれなりの書状を持ってきな！！」



レベツカさんが一喝すると、その迫力に兵士の足が止まる。さすが名の知れた冒険者だったことはある。だが、副隊長だけはまったく動じなかった。

「……王国名誉騎士のパルデイン・アガツト様に既に許可は貰い受けている。」

副隊長はそういうと懐から一枚の紙を取り出す。

「なっ!?!?・・・アガツト家の当主が出張ってんのかい!?!?」

「坊ちゃんよ、いったい何やったんだい?当主の書状があるってのは指名手配犯よりも優先的に捕らえるって意味だぜ。」

マハツトさんが呆れた顔で俺に聞いてくる。断言してもいいが、俺は何もやっていない。

「……なんとか、話をつけてきます。ちゃんと話せば分かってもらえると思いますし。」

「やめときなつて!最悪殺されちまうかもしれねえぞ!」

ちゃんと状況を説明すれば矛を引いてくれるはず。それにレベツカさんやマハツトさんに迷惑は掛けたくない。そう思い、俺は階段を下りて兵士たちの前に姿を現す。

「俺はここに居るぞー!」

## 第8話

「痛ッ

」!

酒場に出て行くと、すぐに取り押さえられ手首に縄を巻かれる。血が止まるかと思うほど強く結び付けられた縄は何やら、薄っすらと光を放っていた。

「魔法を使おうとしても無駄だぞ。それには封魔の魔術印が刻まれている。」

魔法を使うも何も俺は何も使えないから意味は無いんだが、何を言っても取り合ってもらえないだろう。とりあえず、縄を爪で削ろうとしてみる、が。やはり光の膜のようなものが邪魔をする。

「……魔法が駄目だからと言ってその程度の物理干渉で千切れると思うな。阿呆め。」

(あ、阿呆だと!?今こいつ俺のこと阿呆と言いやがったのか!よし、分かったこいつは気にいらねえ!絶対に仲良くななんて無理な奴だ!あと絶対こいつ友達いねえ!!)

その後、屋敷に着くまでずっと奴を睨み付けていたが、奴はまったく表情を変えなかった。屋敷に着くころには奴のことを『鉄仮面』と心の中で呼んでいた。

屋敷の壁は1日で修復されていた。一体どうやったのかは知らないが、恐らくこれも魔法というやつだろう。

屋敷の中に連行されると、俺は大きな教会のような部屋に通された。ただ、教会と違うのは十字架の代わりに特別騎士団がつけている紋章、つまりアガツト家の家紋が掲げられていることだ。そして壇上には大きく、豪華な椅子。まるで王様が座るよう作られた椅子が置かれている。

「ここで待て、もうすぐこの家の主であり名誉騎士であるパルディン様がいらっしゃる。命が惜しくば大人しくしているんだな。」

そういうと副隊長は俺を『王座』の前に跪かせると3歩ほど後ろで待機した。周りは他の兵士で取り囲まれる。

(……人が増えてきた。)

最初にこの部屋に入ったときにはちらほらと数人いる程度だったが、俺がここに来てからは人が増え続けていた。そしてその中には見知った顔もあった。

(………あの子だ!!)

その赤髪の少女は入り口から伸びる赤い絨毯の引かれた『王座』へと続く道を歩いてくると、両脇にある椅子の最前列に座った。

(何だかんだでこいつが原因なんだよなあ。でもまあパンツ見てたのは俺だしなあ……。)

そんなことを考えていると後方の扉が開く。そこには少女と同じように燃えるような赤髪をした40代くらいの男がいた。豪華な軽鎧を身に着けている様はまさに騎士だろう。何よりも、素人目からも分かる『強さ』がある。力や意思……何をもってもこの人を倒すことは出来ないのではと思わせるほどの威厳に満ち溢れた人だった。

ザザッ

その場に居た俺以外の人間が全員立ち上がる。兵士に限っては敬礼しそうな勢いだった。その男が跪いている俺のすぐ横を通り過ぎ、『王座』に着く。

「楽にせよ。」

その男の言葉に、この場に居る俺以外の全員が従う。日本という国では、絶対に見ることの出来ない『王者』がそこに居た。

「貴様が私の結界を破ったという者か？」

視線がこちらに向く、その目は深紅の光を宿していた。

「違います！俺は結界を破ってもいないし、壁も壊していません！」

「で、あるうな。」

正直、帰ってきた言葉には拍子抜けをした。

「……えっ？な、何故」

「壁は内側から壊されていたであろう？破片が外に向かっておつたからな。……そして壁の焦げた跡と規模を見れば、恐らく爆発系<sup>エクスプロ</sup>魔法<sup>マジック</sup>。そうであるう……リリーナよ。」

男は最前列に座る赤髪の少女に目を向けた。すると少女は立ち上がり、男に向かって一礼する。

「仰る通りですわ、アガット卿。あの壁はわたくしが誤って破壊したものです。」

少女の言葉にざわざわと会場がざわめく。しかし、では

「では、何故。私がここに貴様を連れてきたか……そう聞きたいのであるう？」

一瞬心が読まれたかと思い、心臓が跳ねた。

「簡単なことだ、黒髪黒目の青年と報告を受けていたのでな。興味が沸いたのだよ。」

男は肘掛に肘を立て頬杖をつくと、ねぶるように俺を見る。にやつきとも微笑ともとれるその笑みに俺は苛立ちを覚えた。

「『黒き英雄王』という話がある。」

「知っています。俺が捕まった店の女将さんに聞きました。」

自分でも少しばかり語気が荒くなるのが分かった。だが、この男は俺のこの様子を見て笑みをさらに強くした。

「なかなか物怖じしない小僧よ……。やはり連れてきて正解だったわ。」  
縄を解いてやれ。」

男がそういうと、副隊長が一瞬戸惑ったが縄を解いた。少し手首を回し、指先の感覚を確認する。

「小僧。特別騎士団に入るつもりは無いか？」

「いえ、興味が無いもので。遠慮します。」

俺はそういうと来た道に戻る。追ってくる者は居なかった。

第8話（後書き）

毎回長さがまちまちでじりめんない。



## 第9話（前書き）

皆さんも風邪には十分ご注意ください。

間違っても点滴など打たれないように！

それと第4話、第5話の冒頭で違和感を持たれた方がいらっしやっ  
たと思いますが、大分文章が飛んでいたようです。修正しました。  
申し訳ありません；

## 第9話

高民区画を抜けると、俺はそのままレベッカさんのお店に向かう。マハットさんとレベッカさんには心配をかけてしまっただろう。まずは2人に謝りに行かなければならないと思う。

「ん？」

何やら視線を感じて、周りを見渡すと遠巻きに見ている人が数人いる。忌々しげに見るものもあれば、不安そうな顔でチラチラと見る者もいる。総じてあまり良い視線ではなかった。

(そうか……朝、俺が連れて行かれるのを見た人もいるんだよなあ。)

騎士団数人がかりで連れて行った男だ、こんなに早く出てきて不信がるなど言うのも無理な話だろう。しかし、俺自身は特に何もしていないのにこんな不条理な扱いを受けると何だか落ち込むのも当然だと思つて、嫌な顔するのは許してもらいたい。

「黒は目立つから分かりやすいなあ！ガハハハハ！」

驚いて声のした方向を向くと、マハットさんが立っていた。マハットさんは嫌な視線など気にしないと云わんばかりに俺に近づいてガハハと笑い、肩を組んだ。

「ちょ  
よ！？」  
！マハットさん！あなたまで変な視線で見られます

「何構わんさ。この街に店持つてる訳じゃねえしな！」

ガハハと笑うマハットさん、この人は不安を消し飛ばしてくれる。異世界に来て間もない俺を世話してくれるし、何故この人はここまでしてくれるのだろう。そう思うと聞かずにはいられなかった。

「何で、マハットさんは・・・そこまでしてくれるんですか？」

呟くような声だったが、マハットさんは俺の言葉を聞きポンポンと2回俺の背中を叩くと、またガハハと笑った。

「金のやり取りだけなら他人、だが酒を飲み交わせば友人さ！簡単なことだろう？」

実に簡単な言葉だった。だが、その言葉が心に沁みていくのが感じとれる。どんなにクサイ台詞でもこの人が言うとなんか違ってしまっから不思議だ。

「ありがとうございます。何だか楽になりました。」

「ガハハ！坊ちゃんは礼言ってばっかだな！」

そういってお互いに笑いあうと、自然と視線は気にならなくなっ

「そうかい、結局ついて行く事にしたんだねえ。」

レベッカさんの店に帰ると、マハットさんから街に居辛いなら一緒に来ないかと提案を受けたのは昨日のこと。嫌な気分はレベッカさんの店の常連客やマハットさんたちと飲んで騒いでいたらどこかへ行ってしまった。

「はい。どちらにせよ身を立てる方法を見つけるなりして、元の世界へ帰る方法を探そうと思っていましたから。」

情報が1000年前のことだ、そう簡単には見つかるとは思っていない。とにかく暫くは生活していける環境が必要だ。帰る方法を探し出しても死んでしまったら意味がない。ある程度は生きていくためのスキルが必要だろう。

( やつぱり、色々な場所へ行ける旅商人か冒険者あたりがいいよなあ……。でも、身を守る技術なんて無いし。何か格闘技とか武術でもやってりゃ良かったなあ。 )

「おーい、タケル！こつちに手え貸してくれ！」

マハットさんに坊ちゃんはやめてくれと頼むと、「いやあ俺は坊ちゃんの名前しらねえしなあ。」と言っていてまだ自己紹介をしていないことに気づいたのも昨日のこと。かなり親しくなったと思っていたが自己紹介もまだだったとは、何だか笑えてくる。

「はい！今行きます！」

マハットさんの荷馬車に荷物の積み込みが終わると、御者台のマハットさんの横に座る。木の板に座っているので結構痛い。

「マハットがいるから心配ないと思うけど気をつけて行ってきな！」

出立の時刻になると、街の入り口までレベッカさんが見送りにきてくれていた。店が忙しくなるのは夕刻からだから大丈夫だと言っていたが・・・宿屋も兼業しているんじゃないのだろうか。

「はい！お世話になりました！」

「またここいらに来ることがあればうちに寄っていきな！安くしておくよ。」

レベッカさんはそういうと、キャスケットを俺の頭にかぶせる。どこに持っていたのだろうか。

「あなたの黒髪は目立つからね。女物だけど我慢してちょうだいな。」

「・・・いえ、ありがとございます。大事に使わせてもらいます。」

帽子を深く被って顔を隠す。間違いなく泣きそうになっているはずだ。こちらに来て色々あったから少しばかり感傷的になっているのかもしれない。

「じゃあ出すぜ。世話になったな、レベッカ。」

「いつも通り飲んで騒いでただけじゃないか。そんなもん世話したうちに入らないよ!」

レベッカさんがそういうとマハットさんはいつも通り「ガハハ」と笑うのだった。

第9話（後書き）

点・・・滴・・・

## 天成天籟の騎士

私が特別騎士団の副隊長から報告を受けたのは、私がパルディン様と屋敷に帰ってきてすぐのことだった。そう、私がリリーナ様の部屋へ運び込んだ黒髪の青年が逃げ出したとの報告。いや、実際には彼が屋敷の壁を破壊し、侵入。そしてリリーナ様に危害を加えようとしていたところに騎士団が駆けつけ、応戦したが逃げられた・  
・と言う報告だった。

（まあ、本当のところは違うが・・・一応この通りにパルディン様に報告するか。）

あのリリーナ様のことだ、相手の貴族のご子息に腹を立て魔法をぶっ放したのだろう。

（まったく、パルディン様と良いリリーナ様といい。もう少し家臣の身にもなって欲しいものだ。）

かなり気が重かったが、私はパルディン様の待つ『騎士王の間』へ向かった。

「失礼いたします！」

『騎士王の間』とは、パルディン様に付けられた通り名に由来する。現在パルディン様が当主のアガット家は王国12大貴士家のひ



とつで、この国では王家の次に位が高いもののひとつである。12  
家の中でも最も戦闘力に秀でた家であるアガット家は、戦争のた  
びにその功績を挙げ、王の信頼を得てきた。

「ウィルナーか、何用か？」

その歴史あるアガット家の中でも、最強と謳われた現当主。パ  
ルデイン・アガット様は恐らくこの先何百年と語り継がれて行く方  
だろう。

「報告申し上げます。」

私が副隊長から受けた報告をそのまま申し上げると、パルデイン  
様はにやりと笑う。

「……黒髪に、黒目か。」

黒髪黒目で思い出せるのは『黒き英雄王』のお伽話である。10  
0年前、それこそ本当かどうかも確かめる術などありはしないの  
に、このパルデイン様はまこと話だと言う。

「我が書状を出そう。今すぐその男をここに連れて来い。」

「……どうされるお積りで？」

私がそう聞くと、パルディン様はフツと一瞬笑つと椅子に深く腰掛ける。

「どうするも何も、私の力となるならば良し。ならぬなら害悪とならぬようするまで。」

「それは、始末するという意味で？」

「……好きにとって構わぬ。」

私は一礼すると、騎士王の間を離れた。

「ウィルナー隊長！その役目、私にやらせてください！」

私が数人、騎士団から編成して黒髪黒目の青年を連行しに行こうとしていると、副隊長である、ミゲルが私に懇願しに来たのである。

このミゲル副隊長は、赤いバンダナがトレードマークでいつも両腰に剣を1本ずつ差している。実力は折紙付で、騎士団では私に次ぐ強さを持っているだろう。だがしかし、まだ若い。歳は私の半分にも満たないため、経験も少ない。

「……相手に剣を振るわないと誓えるか？」

ミゲルは一瞬戸惑うが、すぐに「はい！」と返事をする。言は取

ったが……不安は募るばかりか。

ミゲルに連行を任せてしばらく、捕縛せりとの一報が入った。私はパルデイン様に伝えるよう巡回兵に命令をする。

（さて、見極めさせてもらおうぞ。）

私は黒髪黒目の青年の姿を思い出し、謁見予定の騎士王の間へ足を向けるのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3619x/>

---

魔力と知識の使い方。

2011年10月21日08時07分発行